【71】揚子江から長江へ

中国最大の川、世界第3位の長さを誇る「長江」(ちょうこう)、中国語ではチャンジャン(Chan Jiang)は、私の中学時代には「揚子江」(ようすこう)という名で教わりました。その後、本当は長江というのだとして地図帳の標記も長江に変わり、揚子江は記されていてもカッコ書きになりました。国を代表する大河川の名が変わるのも変だし、これは中国が昭和24年(1949)に中華民国から共産党政権の中華人民共和国へ変わった事が原因かと思ったりしましたが、それ以上気にしないまま今日に到りました。

中国語、日本語を股にかけた碩学、高島俊男先生の著書を読んでようやくその理由がわかりました。(※)日本が中国と縁が深いというのは平安時代以前の古代のことであって、鎌倉時代以降あまり交流は無く、江戸期に到っては全く誰も中国へ行ってないそうです。近代の中国に関する情報は西洋人を介して日本に入って来たので、地名なども原名の漢字を日本風に読まずに西洋人の云うのをマネしたのです。北京(ペキン、Peking)、上海(シャンハイ、Shanghai)、香港(ホンコン、Hong Kong)などがその例ですが、日本風の読み方ならば、ホクキョウ、ジョウカイ、コウコウというところでしょう。

さて、揚子江(ヤンツージャン、Yangtze Jiang)はというと、もともとは長江最下流部の上海あたりの地域(揚州)で使われていたローカルな名称で、それを聞いた西洋人が長江全体のことと思いきり、Yangtze Riverと呼んだというのがことの起こりのようです。それがわが国に伝わったのですが、この場合は揚子江を日本流の音読みで「ようすこう」と読んでいます。わが国は文字を持たない文化でしたので、長年の苦勞により漢字を日本語で読むという言語技術を作り上げました。

高島先生は、それは大間違いだったと言われますが、中国や朝鮮の漢字の地名や人名を現在でも日本読みしています。習近平(シー・ジンピン、Xi Jin-ping)を「しゅうきんぺい」、毛沢東(マオ・ツァートン、Mao Ze-tung)を「もうたくとう」などという読み方は日本人にしか通用しないでしょう。

“ギョエテとは オレのことかと ゲーテ言い”という文化的な川柳が昔ありましたがその流儀に習えば、“しゅうきんぺい とはオレのことかとシージンピン言い”という話になります。

(※) 高島 俊男、お言葉ですが・・・、文春文庫、1999